

大学生の自閉スペクトラム症に対する受容的態度の形 成要因

— 接触経験に焦点を当てて —

立命館大学大学院応用人間科学研究科
臨床心理学領域
合川 茉莉花

Nevill & White (2011) で使用された **Openness scale** がわが国でも適用可能かどうかを確認するために、大学生 141 名（男性 51 名，女性 90 名）を対象に，尺度の信頼性および妥当性を検討した。因子分析の結果，「親和性」，「類似性」，「受動的肯定」の 3 因子が抽出されたことに加え，一定の信頼性が確保された。妥当性の検討においては，丹野（2008）の改訂版友人関係機能尺度を使用した結果，十分な妥当性が得られなかった。加えて，翻訳版 **Openness scale** を用いて大学生の自閉スペクトラム症への受容的態度を検討するために，接触経験の有無およびその関係性，専攻，学年，性別の違いによる 3 因子それぞれの平均値の差を検定した。その結果，接触した相手との関係性が身内である学生，知人である学生の方が接触経験なしの学生よりも「親和性」が高いこと，接触した相手との関係性が身内である学生のほうが，接触経験なしの学生よりも「類似性」が高いことが明らかになった。専攻別では人間福祉専攻の学生のほうがその他の学生よりも「親和性」が高かった。学年，性別と受容的態度との関連については，3 因子のいずれにおいても有意差が認められなかった。本研究の結果から，大学生の自閉スペクトラム症への受容的態度を促進するためには，自閉スペクトラム症者，あるいはその傾向がある者との接触経験が重要となることが示唆された。